

## 海外研修 a

### ① 家政学部食物学科 准教授 鈴木 礼子

研修期間 2025年1月1日～2025年3月31日（3カ月間）

研修先 スウェーデン（カロリンスカ医療研究所）

指導担当者 Marie Löf（カロリンスカ医療研究所 生命科学/栄養学科 教授）

研修課題 食・栄養 と 生活習慣病との関連の栄養疫学研究

### 報告内容

栄養学領域の教授が在籍するカロリンスカ医療研究所を研修先とし、研究テーマ「女性・子ども・移民などを対象とした疫学・食教育・公衆栄養マネジメントや栄養改善にむけた栄養政策について」に日本との違いを検討しながら取り組んだ。研修中は、研究セミナーにおいて、相互に研究発表を行い、女性、子ども、若者の抱える健康課題について、現地の栄養士や研究者と討論し、教育および研究交流を深める機会を得た。スクリーンタイムや女性疾患などの研究や院教育に触れる機会もいただくことができた。食選択に役立つマークなどを活用した栄養政策についても、文献調査・アンケート結果等を通して相互の違いについて意見交換し、今後の食環境づくりの在り方を検討した。研究成果の一部は専門誌に投稿し発表予定である。

## 海外研修 a

### ② 文学部日本文学科 准教授 吉田 薫

研修期間 2024年4月1日～2025年3月31日

研修先 イギリス（ケンブリッジ大学）

指導担当者 Laura Moretti（アジア・中東学部 教授）

研修課題 近代中国の知識人と西洋、日本との関わりについての総合的研究

## 報告内容

本研修では、イギリスのケンブリッジ大学アジア中東学部に所属し、日中両国の知識人と西洋の関係性について考察を深めるべく、主にケンブリッジ大学の各図書館にて関連資料の調査を行った。大学では研究者や学生と交流を重ねたほか、多くのセミナーや会議に参加した。とりわけ近代の日本及び中国で受容された西洋の諸概念やそれに連なる価値観について、現今の課題として議論をする機会に恵まれたことは、アジア諸国の歴史と思想を多層的に考察する上で非常に有益であった。

その他イギリス各地の博物館や図書館にて、研究課題に関わる資料の調査を行った。本研修中の成果の一部は、会議で報告し、論文としてまとめた。今回調査・収集した資料をもとに、新たな研究課題についても作業を進めている。

## 海外研修 a

### ③ 文学部英文学科 准教授 奥畑 豊

研修期間 2024年4月1日～2025年3月31日

研修先 イギリス（オックスフォード大学）

指導担当者 David Dwan(英文学科 教授)

研修課題 イギリスを中心とした現代英語圏文学の政治的側面からの再検討

## 報告内容

二十世紀における様々な政治的事件とイギリスを中心とする英語圏文学との関係性を再検討し、新たな系譜を構想するという課題を遂行すべく、オックスフォード大学の英文学科を拠点に研究を行った。現地では現代文学とポストコロニアル文学に関するセミナーの他に、授業や講義に出席して知見を深めると共に、オックスフォードとロンドンの図書館を活用して文献の調査を行った。主な研究対象の作家である J. G. Ballard については日本語の単著をほぼ完成させただけでなく、米国のジャーナルに論文を掲載した。Angela Carter についてはリスボン大学で開かれた学会で講演を行い、各国の専門家と意見交換を行った。また、英語圏の独裁者小説に関する論文が欧州の学術誌に採択された。

## 海外研修 a

### ④ 人間社会学部現代社会学科 教授 西村 一之

研修期間 2024年4月1日～2025年3月31日

研修先 中央研究院台湾史研究所

指導担当者 林 玉茹（中央研究院台湾史研究所 研究員）

研修課題 台湾漁民社会における移動・移住の歴史人類学

## 報告内容

台湾・中央研究院台湾史研究所の訪問学人（Visiting Scholar）として、林玉茹研究員の協力と指導を受け研究課題「台湾漁民社会における移動・移住の歴史人類学」に取り組んだ。南東部の漁業地で現地調査を複数回実施し、加えて東北部と南西部でも短い調査も行った。あわせて関連する文献資料の収集にあたった。成果の一部は、国際会議（1回）、学術講演（2回）、社会人講座（1回）で発表した。

受入れ機関では、社会経済史研究群さらに海洋史読書会（研究会）に所属した。また、中央研究院は多くの研究機関で構成されており、他の研究所が主催する講演やセミナーに出席、さらに院外でのワークショップなどにも積極的に参加した。これらを通し、今後の研究展開を考える上で、有効な示唆を得ることができた。

## 海外研修 a

⑤ 国際文化学部国際文化学科 准教授 高井 奈緒

研修期間 2024年4月1日～2025年3月31日

研修先 フランス（ソルボンヌ・ヌヴェル大学 19世紀の詩学に関するリサーチセンター）

指導担当者 Éléonore Reverzy（ソルボンヌ・ヌヴェル大学 教授）

研修課題 ゴンクール兄弟の美学と18、19世紀の文化

## 報告内容

フランス国立図書館では司書の方々の助けを借りて資料調査が捗り、検索の技術も向上したほか、ゴンクール兄弟の自筆の創作メモも閲覧することが出来た。モードに関する資料を多く所蔵するガリエラ美術館の図書館でも司書の方に非常に興味深い資料を閲覧させていただき新たな知見を得た。またゴンクール兄弟研究を現在牽引し、指導教授となって下さったソルボンヌ・ヌヴェル大学のエレオノール・ルヴェルズィ教授や、以前博士論文の指導教授であったゴンクール兄弟研究の泰斗であるナンテール大学名誉教授のジャン＝ルイ・カバネス氏からも1年を通じて多くの貴重なアドバイスを得ることができた。ゴンクール兄弟が作品で言及している美術工芸品の調査を様々な美術館で行い、同じく作品に頻繁に表れるモチーフであるサーカスや人形劇についても調査を行い理解を深めることが出来た。2024年5月に行われたゴンクール兄弟の研究会では口頭発表を行い、研究者たちと意見を交わした。2025年5月に研究成果をまとめた雑誌論文を1本提出予定である。その他の海外研修の成果についても、今年か来年中に発表を予定している。